幼い頃の記憶といえば、
母親から切られ殴られ、
焼かれた記憶しかない。

父にはそうされることは
なかったけど、父が母を止めて
くれるようなこともなかった。

第25話 兄弟

僕の家は暗殺稼業で
成り立っていて、
僕が6歳の頃だったか、
初めて暗殺の依頼を受けた。

母が勝手に受けた依頼だ。

その時は僕を殺したいが為に、
母がその仕事を持ってきたのだと
思っていたけど

今考えると僕はおもちゃで、ついでに
小遣い稼ぎの道具だったのだと思う。
僕を殴っている時の母は笑っていたから。

僕が憎いのではなく、
単にそういう人だった。

その時受けた依頼は簡単な
ので、飲み物に混ぜ物をして
逃げてきただけで終わった。

当分は簡単な依頼をこなし、
母から暴力を受けるだけの
生活が続いた。

仕事の報酬をもらった
ことはない。

7歳の時、
僕に弟が出来た。

ゴーテリア家に
養子として来たのだ。

名前は…？

名前？

教えない

でも…
そうだな

ザック、
ザックって
呼んでよ

ザック…

父が何故ザックを
連れて来たのか
疑問だった。

でも初めて一緒に任務に
行った時にわかった。

その時のターゲットは
同業者で、戦闘が
免れられなかった。

僕は戦ったことがなかったから、あっという間にトドメを刺されるところまで追い詰められた。

まあ相手は大人で、僕は7歳だったしね。

その時助けてくれたのがザックで、いとも簡単に相手を斃(たお)した。

年は僕と変わらないのに。

ジン〜
お前弱いな

あの
屈託のない笑顔を
僕は未だに
忘れられない。

僕にとって邪魔な
存在になると思いきや、
ザックは唯一気を
許せる人間になった。

相変わらず母からの
暴力は続いて、ザックは
別にそれを止めたりは
しなかったけど、

それでも、
僕を人間として
扱ってくれる
ただ1人の
人間だった。

僕が9歳の時、
母は死んだ。

僕はそれなりに母に情を持って
いるのだと思っていたけど、
死んで初めてそれが
勘違いだったとわかった。

無くなってみないと
わからない。

それが大切だかどうかは。

それからは自分たちで依頼を受けるようになった。

僕たちみたいな日陰者は必ずJHS（国立中学）に通わなければならないと決まっていたから、表向きは普通の学生として、裏では暗殺者として生活した。

あの頃は楽しかったな

ザックと毎日一緒に登校して、一緒に勉強して、

任務をこなして夜遅くまでやってる店で夕食をとって、

月がよく見える部屋で寝てた。

僕たちは
離れることがなかった。

本当に、
いつでも。

去年の今頃、僕とザックは
いつも通り依頼された殺しの為に、
古い屋敷を訪ねた。

空気の澄んだ綺麗な夜だったのに、
その屋敷の周りだけ
霧がかかっていて、

それもまた酷く美しく見えた。

僕とザックは手分けして
ターゲットを探した。

その時はターゲットの
顔がわからなかった。
顔に大きな傷があるらしい。
それだけ。

だから目の前に、
顔に傷がある男が
現れた時、
僕は躊躇いなく
殺そうとした。

そいつが
なかなか強くてさ

あっという間に
追い詰められたのは
僕の方。

首を切られそうになった時

あ

!!

何故か隙が出来たんだ
そいつに。

ジ…

だから斬った。

即死だよ。

その後は
ザックを
探したけど
見つからなくて

先に
帰ったのかな、
なんて。

でも、
変だな。

こいつの声、
少しザックに
似ていた気がする。

……

あの声…

嫌な予感がした。

心臓ってあんなに速く動くんだね。

僕は走った。

早く安心したくて。

コツ…

大切なものは

無くなってみないと
わからない。

あの日から
僕の時は
止まっている。

ずっと。